

〈中本正智博士 著書紹介〉 『図説琉球語辞典』

加治工, 真市

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

67

(発行年 / Year)

1995-02-24

『図説琉球語辞典』

加治工 真 市

本書は、著者が30年余にわたるフィールドワークから得た膨大な琉球諸方言の資料を整理して辞典形式にまとめたものである。これまでに、地域単位としての優れた方言辞典は存していたが、琉球全域を網羅的に調査した上で、それらがどのような分布を示していて、その分布から語の歴史がどう読みとれるかという点を明らかにする辞典はなかった。

著者は資料の整理に当って比較言語学と言語地理学の方法論の長所を同時に駆使している。言語地理学的調査には悉皆調査が必要だが、本書では、北は奄美大島諸島の喜界島から南は八重山群島の与那国島に至る128地点を調査地点として選定している。同地域の有人島の全域にわたっているので悉皆調査に準ずると見てよいであろう。これらの調査地点は国土地理院発行の5万分の1の地形図を利用し、緯度線と経度線による柵目を10等分していった、その柵目に該当する地点が8桁の番号で表示されているから、将来にわたってその地点を特定することが可能である。集落が移動したり、過疎化により消滅することがあっても、元の位置がわかるようになっている。

インフォーマントの選定については、「その島（村）で生まれ、島（村）で育った60歳以上の方々を主とした、複数の場合は比較のために壮年の方々も加えた」というから、全ての地点にわたって年代差を見るための世代区分がなされているわけではない。従って著者は、この調査によって各地方言のラングを採録することを狙ったもので、いわゆるパロールを狙ったものではないといえよう。一人の調査者の目と耳によって昭和30年代という共時態の均質な琉球方言のラングが採録されていることになるわけで、それだけでも貴重な、得がたい資料といえよう。

こうして得られた諸方言の中から、(01) 身体分野に関する語彙 (22語)、(02) 人間関係語彙 (20語)、(03) 動物関係語彙 (19語)、(04) 植物関係語彙 (18語)、(05) 方角、日時関係語彙 (16語)、(06) 自然関係語彙 (20語)、(07) 食・味覚関係語彙 (20語)、(08) 衣（着物）関係語彙 (13語)、(09) 住居関係語彙 (11語)、(10) 道具関係語彙 (16語)、(11) 生活関係語彙 (14語)、(12) 祭祀関係語彙 (9語)、(13) 遊戯関係語彙 (8語)、合計二〇六語を選定して言語地図を作成することにより、琉球列島における言語分布の型を発見した。方言のパロールをもとにしたおもしろい分布図に基づく言語のダイナミックな変化過程を示したものではないが、二百六枚の言語地図を重ねることにより、言語分布に一定の型の存することに初めて気付いたのである。これが以後の著者の学問的方向を決定づけたものと思われる。

る。

本書において著者が示したもう一つの方法は、言語地図で示された分布から単語の歴史を考察する際に、『語音翻訳』（申叔舟、1501年）、『琉球館訳語』（15世紀初頭）、『使琉球録』（陳侃、1534年）、『音韻字海』（周鐘他、1573年頃）、『中山伝信録』（徐葆光、1721年）等の古文書を参照しながら『おもろさうし』（首里王府、第1巻、1532年、第2巻、1613年、第3巻～22巻、1623年）の用例を引きつつ、比較言語学的考察を進めていることである。本書の優れた特徴の一つであり、それ故に著者が分析して得た結論には説得力がある。

琉球語の成立に関する研究が少ない中で、本書のように、具体的に、Ⅰ、史前琉球語の時代（紀元前300年以前）、Ⅱ、原琉球語の時代（500年まで）、Ⅲ、集落語の時代（1187年、舜天即位、王政以前）、Ⅳ、地方語の時代（1477年、尚真即位、中央集権以前）、Ⅴ、首里王朝語の時代（1609年、島津氏琉球入り以前）、Ⅵ、九州語受容の時代（1879年、廃藩置県以前）、Ⅶ、共通語受容の時代（現代まで）のように時代区分を明示したのは数少ない。これを可能にし得たのは、膨大な資料と二百六枚の言語地図を作製したこと、その言語分布に一定の型があり、言語の新古と密接な関連を有していること、それらが古文書の言語資料である程度証明されると考えられることがあるからであろう。琉球列島における語の分布型は、（1）全琉球型、（2）北琉球型（①奄美型－九州方言の影響、②沖縄型－15世紀頃に首里語として確立）、（3）南琉球型（③宮古型－より古い語を残す傾向、④八重山型－四箇村を中心に中央型。波照間島、西表島、新城島、小浜島、川平などに周辺型）、（4）孤立型－与那国島、のように類型化して示すことができるという。これらの基礎作業に基づいて、著者独自の琉球方言の区画が示されており、説得的である。「琉球諸方言の特色」は、全琉主要方言の特色を要領よく簡潔にまとめている。首里方言は、15世紀頃に確立された、琉球語の中で最も勢力のある方言とされ、共通語との間に $e \rightarrow i$ 、 $o \rightarrow u$ 、 $a \rightarrow a$ 、 $i \rightarrow i$ 、 $u \rightarrow u$ （ s 、 z 、 ts の後では i ）の音韻対応があること（三母音化の現象）。 $ai \rightarrow e$ 、 $au \rightarrow o$ （開音に対応）、 $ou \rightarrow u$ （合音に対応）、 $ae \rightarrow ai \rightarrow e$ 融合現象があること、 ci （ $c = k$ 、 g 、 t など） $\rightarrow tʃi$ 、 $dʒi$ となる現象、または icv （ $c = k$ 、 g 、 t など） $\rightarrow -itʃ$ となるような口蓋化の現象（これは十五世紀ごろから起こる）などが示されている。ハ行子音は、 $[\Phi]$ と $[h]$ が存する（ファー《葉》、ハー《歯》）し、語中、語尾の音節 $[ri]$ は $[r]$ が脱落する現象（トゥイ《鳥》）や、ワー《私》とッワー《豚》のように、声門破裂音 $[ʔ]$ が音韻的対立を示すこと、動詞終止形が連用形に「居ム」が下接して形成されたものであり、形容詞終止形が語幹に接尾辞「サ」が結合し、さらに「アム」（有る）が下接して形成されたものであるという構造的特徴を説いている。その他糸満方言では、口蓋化の現象が認められず、キヌー（昨日）、キム（肝）のように言うこと、ダ行音とラ行音が混同すること（ティーラ《太陽》、ルシ《友》）、グロツタルストップの $[ʔ]$ が弁別の特徴でないことなどがコンパクトにまとめられている。

名護方言は沖縄北部方言の中心と位置づけられ、その特徴として、ハ行 [P] 音が存すること（パー《葉》、パターキ《畑》）、カ行音がハ行音に変わること（ハジ《影》、フミー《米》）、無気喉頭化音と非喉頭化音の対立が存すること（ップニ《舟》対プニ《骨》）、語中語尾のバ行の [b] が脱落する現象（クイ《首》、ワラーイ《童》）などがあげられている。

久高島方言は、沖縄南部の東方海上に浮かぶ島で話されていることばであるが、ハ行子音が [P] 音を留めており、かつ、無気喉頭化と非喉頭化で対立を示すこと、サ行音が特殊な音に変化している（ラハキ《酒》、アリヒ《汗》）ことなどから、北部方言に近いことを指摘している。特にサ行音の特殊変化した音を従来 [θ]（服部四郎）と表記されていたものを、[ɾ] と認定し、表記したのは著者が最初であり、音韻解釈に新しい観点を示した。

奄美方言は、名瀬、佐仁、与路島、徳之島、喜界島、沖永良部島、与路島の諸方言の特徴が簡潔にまとめられている。例えば、名瀬方言では、 $a \rightarrow a$ 、 $i \rightarrow i$ 、 $u \rightarrow u$ 、 $e \rightarrow i$ 、 $o \rightarrow u$ が認められ、 $e \rightarrow i$ となる点は奄美方言の特徴とされている。従って連母音の $ae \rightarrow \ddot{e}$ （メエー [mē:]《前》[maĩ] ← mae、セエー [sē:]《酒》[saĩ ← sahi ← sake]）の音韻現象が認められる。無気喉頭化音と有気非喉頭化音の対立が存すること（ッニ [nʔi]《稲》：ニ [ni]《荷》）や語中の [k] が [h] になる（ハー [ha:]《赤》、モホ [moho]《婿》）など、また動詞終止形が、連用形+ヲム（居る）に由来するユミュン（読む・主観的判断）系と、連用形+ヲリ（居る）に由来する、ユミュリ（読む・客観的な事実を表す）系との二種類を有すること、形容詞終止形も語幹+サ+アム（有る）系（タカサン《高い》）と、語幹+サ+アリ（有る）系（タカサリ）の二種類が併用されていることなどが示されている（以下省略）。

宮古方言では、平良、狩俣、大神島、池間島、伊良部島、多良間島方言の音韻現象が簡潔に要領よくまとめられている。例えば、平良方言では、国語のイ段音に対応する中舌母音 [ɪ] が存すること（ピィシィ [piʃi]《日》、チィヌ [tsɪnu]《昨日》）、ハ行 [P] 音が保たれていること（パー [pa:]《葉》、ピッカマ [pɪkaʔi]《光る》）など。また、成節的なヴ [v] が存すること（ユヴ [juv]《粥》、アウヴァ [avva]《油》）、ワ行音に対応する [b] が認められる（バン [bag]《私》、バッシマ [baʃʃiʔi]《忘れる》）こと、成節的な [m] が認められること（ムー [m:]《芋》、アム [am]《編む》）、動詞の終止形として、カキシム [kakɪm]（書く）より、カキシ [kakɪ]（書く）が多用されることが、形容詞は語幹を重ねる形（タカータカ [taka:taka]《高い》）で終止形の機能を果たすことなどがまとめられている。（以下省略）。

八重山方言では、石垣島、波照間島、小浜島、西表島、竹富島、黒島、鳩間島の諸方言音韻の特徴が簡潔にまとめられている。例えば、石垣方言（四箇村）では中舌母音 [ɪ] があり、国語のイ段音に対応することから、宮古方言と基層は共通すると認めている（ピィ [pɪ:]《火》、キッヌ [kɪnu]《昨日》）点や、ハ行子音が [P] 音であり（パリィ [pari]

《針》、プニ [Puni] 《骨》) など、さらに、ワ行音に [b] が対応する (バシィ [basī] 《驚》、バヌ [banu] 《私》) ことなどがあげられている。動詞の終止形は、カキシ [kakʰiŋ] (書く)、カクン [kakug] (書く) があり、基本的には宮古方言に近いものの、沖縄本島方言の影響を強く受けた形を示しているとしている。形容詞の終止形も、タカサン [takasag] (高い) のようになるのは沖縄方言の影響だとしている。この点は宮古方言と大きく異なる。

与那国方言は、基層は八重山方言と繋がっているが独自の変化を起こしていて、他方言と大きく異なった姿を示しているとしている。先ず母音が三個しかなく、三母音化が極度に進んでいる (a → a、i → i、u → u、e → i、o → u) こと、第一音節が脱落して第二音節の [p]、[t]、[k]、[tʃ] などの子音が無気喉頭化音する (ツクン [kʰug] 《聞く》、ツター [tʰa:] 《蓋》、ツティー [tʰi:] 《口》) 現象が存すること、ヤ行音がダ行音となる (ダー [da:] 《家》、ダマ [dama] 《山》、ドゥル [duru] 《夜》) こと、ワ行音がバ行音となる (ブン) [bug] 《居る》、バルン [baruŋ] 《割る》) 現象などが簡潔にまとめられている。

以上の予備知識を得て、更に個々の語 (方言) が琉球全域にわたってどのような分布を示すか、これらの語はどのような変化過程を経て今日のような語形に形成されたのかについて整理し、まとめたのが本書である。従って、普通の辞典のように、①見出し語、②音声表記、③品名詞、④語義、⑤意味記述、⑥用法、⑦派生的意味、⑧慣用的表現、等のような、いわゆる各語の語義、意味の広がり、語法、語史等に関する知識欲求を満足させるように編集することを目的とした辞典ではない。

本書は、調査語彙 (二百六語) を全琉 (百二十八地点) にわたって方言を調査し、得られた二百六語の方言地図を作製し解釈、解説した辞典である。言語地図は、まず各方言を類似したものにとりまとめ、グルーピングし、記号化して示した。記号は主として四角形、円形、三角形、逆三角形、星形、屋根形、ハート形を利用し、それぞれ黒ぬき、白ぬきの1、2、3、4、5、…etcのように示し、また漢数字の一、二、三、四、五…etcのようにデザインし、これらを分類した各方言に与え、地図上におとして共時的な方言の分布を示した。これは言語地理学的方法によるものであるが、十歳 (あるいは二十歳) 間隔のインフォーマントから得られた資料に基づく言語地図による分布 (面白い分布) が見られないこと、買物圏や通学区による分布図との関連、旧間切りや、ヤードゥイ (宿り) と分布図との関連、交通 (宿道) 体系との関連等が見られないことから “etymology through the map” の観点からのダイナミックな語の動きが観察されないという欠点は認められるけれど、それでも二百六枚の言語地図を重ねて見ることによって、「分布の型」が抽出されたのである。著者は、この分布の型を発見することによって文化の流れを看守した。分布の型から導き出される結論を立証するため、著者は前述の古文文献を渉獵し、語史資料を従横無尽に駆使して考察している。二百六枚の言語地図一枚一枚に、「分布と歴史」の項を設定し、各語の変化過程を追及してい

るのである。この項は、いわば二百六語の語史に関する著者の思惟の航跡と見ることができる。こうしてまとめられた二百六枚の言語地図と「思惟の航跡」を見開き形式にし、意味分類に従って十三部門に分類した上で、各部門を①自己を中心に自己から遠いものへ、②上から下へ、③内から外へ、④親しいものから疎遠なものへ、…etcの基準に従って配列して示したのが本書である。因に、分野01では、頭、髪、顔、目、見る、鼻、耳、聞く、口、言う、舌、首、腹、肝、思う、背中、男根、女陰、尻、手、足、毛、の22語。分野02では、人、男、女、親、子、夫、妻、父、母、祖、祖父、男きょうだい、女きょうだい、兄、姉、弟妹、孫、私、あなた、君の20語。分野03では、動物、雄、雌、豚、牛、馬、山羊、兎、犬、猫、鼠、猿、蟻、蛙、魚、蛇、鳥、雀、卵の19語。分野04では、木、生える、枯れる、花、枝、根、草、稲、麦、さつま芋、芋蔓、南瓜、大根、人蔘、パパイヤ、砂糖きび、竹、蘭草の18語。分野05では、東、西、南、北、上、下、右、左、朝、昼、夜、今日、明日、明後日、昨日、一昨日の16語。分野06では、天、太陽、月、星、島、土、砂、山、川、畑、水、海、浜、潮、雨、降る、風、吹く、火、燃える、の20語。分野07では、味、酸っぱい、朝食、昼食、夕食、食べる、飲む、煮る、ひもじい、米、粥、汁、肉、餅、塩、味噌、酢、油、砂糖、酒の20語。分野08では、着物、着る、襟、袖、裾、帯び、紐、緒、布、糸、蓑、下駄、草履の13語。分野09では、家、台所、便所、倉、門、天井、柱、戸、畳、棚、垣の11語。分野10では、道具、枕、櫛、扇、杖、箸、椀、皿、包丁、桶、甕、釣瓶、鍬、鎌、鋤、斧の16語。分野11では、師ごと、大工、子守、商、代、銭、損、嘘、竈、煤、船、帆、旅、ありがと、の14語。分野12では、神、拝む、正月、祝う、縁、位牌、線香、鬼、幽霊の9語。分野13では、歌、三味線、太鼓、踊る、絵、人形、ぶらんこ、遊ぶ、の8語（計二百六語）の諸語の言語地図と考察が前記の要領で配列されてる。

(沖縄県立芸術大学教授)